

「暴力」と「愛の鞭」を混同してはならない

織田邦男

昨年、桜宮高校バスケットボール部主将が体罰を受け、自殺した。報道によると、生徒は自殺の前日まで、顧問の男性教諭から暴力的な体罰を執拗に受けていたという。クラブ活動で生徒を自殺させてしまうような体罰は、暴力そのものであり、もはや教育でも何でもない。

この事件以降、スポーツ名門校などにおける部活指導の体罰が次々と告発され、オリンピックにまで飛び火した。メディアの過熱報道も手伝ってか、「体罰は全面的に悪」という「空気」が蔓延しているようだ。しかしながら、今日本中で喧しい体罰論議は、いかにも冷静さを失っていると感じてならない。

かつて日本には「愛の鞭」という美しい言葉が存在した。今この日本語は消滅しつつある。「愛の鞭」まで体罰だからいけないというのは偽善に思えてならないのだ。

私は決して暴力を肯定するものではない。だが、「愛の鞭」と「暴力」は明らかに違う。「愛の鞭」は「子供達を進歩させることを目的とした力の行使」であり、「暴力」は「自分の鬱憤をはらすことを目的とする力の行使」である。

体罰が「暴力」である限り、決して認められるものではない。だが、子供を想い、子供の成長、そして進歩の為に、時に「愛の鞭」は欠かせないこともあるのではないだろうか。

「子供が受けるべき最初の感謝すべき教訓、それは両親よりの平手打ちだ」とキエルケゴール（哲学者）は述べる。「子供には大人から叱られる権利がある」といわれるように、「愛の鞭」は子供が受ける権利であり、先生や親は子供に与える義務さえある。

報道によると、現在、小学校の学校現場は2割のクラスが学級崩壊状態だという。先生の話の聞かない。勝手に教室を動き回る。給食時間ではパンや牛乳を投げあう。教室や廊下はゴミだらけ。全く授業にならず、教師は自信を喪い、多くの教師が辞め、そして鬱病になったりするという。これこそ「愛の鞭」をも「暴力」と決めつけ、「子供の人権尊重、自主性尊重」という偽善に支配された戦後教育の成果ではないだろうか。

メソポタミアの昔から、手がつけられない子供はいた。そういう子供に対しては、口でだめなら肉体的苦痛で強制していくしかない。これは、古代から経験に裏付けられた実践的な知恵である。

米国では一切体罰を禁止している。その代わりに、「ゼロトレランス」という冷徹な施策を採っている。言って聞かない子は排除する、つまり矯正専用の学校に強制入校させる。教師への暴力は直ちに警察を関与させる。しかも例外は認めない。レーガン大統領は「ゼロトレランス」で荒れた学校を建て直した。これも一つの方法だろう。だが、東洋的感覚からすると、いかにもビジネスライクで「愛」が感じられない。

紳士の国イギリスのパブリックスクールでは、現代でも教育現場で本物の鞭が使われているという。イギリスのエリート育成のあり方は、長期にわたる熱心な模索の結果、文化の中に内蔵されている。「愛の鞭」も大国として受け継がれてきた歴史的ノウハウなのだ。

またマレーシアやインドネシアのような教育熱心な新興国では、教師による鞭打ちが容認されている国も多い。

ちょっと話は逸れるが、「愛の鞭」と通底している事例がある。日教組の教育研究集会である教師が発言した。「子供達が自主的に挨拶をしたいなと思ったら、挨拶を教えます」と。偽善にまみれた教師の言葉にあきれかえった覚えがある。

善悪の分別がつかない子供達に自主性を求めるなんぞ、自主性尊重という美名に隠れた教育の放棄である。自主性といえば一見もっともらしい。だが子供達に必要なこと、当たり前前のことは、強制してやらせることが教育の第一歩である。

子供の人権尊重、自主性尊重といえば誰も反論できない。その結果が2割に及ぶ学級崩壊ではないか。人権尊重と言いながら、実は子供への教育を放棄し、子供の人権を無視しているのだ。

教育は強制から始まる。強制は苦痛を伴うものだ。だが苦痛に耐えてこそ忍耐力が付き、人間として大きく成長する土台ができる。苦痛に心が萎えそうになったとき、「愛の鞭」で奮起をさせることは決して悪いことではない。「監督の平手打ちで目が覚めました」と一流のプロ選手もテレビで語っていた。

「愛の鞭」と「暴力」の境界は、なるほど難しい。だからといって「愛の鞭」まで全面否定するのは誤りである。絶えざる苦悶と反芻の結果、やむを得ず振るう「愛の鞭」は許容しなければならない。

現在の軽薄な「空気」は、教師を萎縮させるに違いない。良かれと思っても「愛の鞭」をふるえなくなるだろう。この「空気」は自己膨張を続け、やがて大声で叱咤激励することも「暴言、パワハラ」と非難されるようになりかねない。そうなれば学級崩壊は2割に止まらないだろう。「愛の鞭」と「暴力」の安易な混同が、日本の崩壊につながることを我々は自覚すべきである。